分かち合う世界へ ㊺

〝最悪〟想定した行動を

アジア自立支援機構代表理事
小沼　廣幸

数カ月前にバンコクの中心でコーヒーショップを始めたと、この紙面で報告させていただいたのを覚えておられるだろうか。何でこの新型コロナウイルス禍の真っただ中に新しいビジネスを始めるのかと、親しい友人たちから親切な忠告を受けた。だが、感染におびえて何もしないで家にこもり続けるのは私の性でない、と強気で始めた新しい事業だが、案の定、大きな波に洗われるように新型コロナウイルスの影響をもろに受けた。

開店当初の3月ごろは一日に70～80人の客が入り、順調に滑り出したかと思われたが、感染拡大に伴う緊急事態宣言の発令と在宅勤務が浸透した影響で客足が急に遠のき、ひどいときには客が一日に数人という状態になった。

そんな中、天の助けか、高い賃貸料が特別に半額になった。そして焙煎したコーヒー豆の販売や家庭でドリップコーヒーを楽しむためのコーヒー器具の売れ行きが良くなった。また、副業で始めた日本製のお茶やコーヒー用の陶器のカップや皿の売れ行きも順調で、本業以外のところで収入が増え、今のところ何とか持ちこたえてきている。来ぬ客を待つより、こちらから売り込みに行くつもりで始めたコーヒーの宅配サービスも、ある程度順調に行けそうな気配だ。

まだ赤字であることに変わりはないが、このコロナウイルス禍の中で、収入源を分散したり、臨機応変に流動的に対処したりするすべを学んだ。コーヒー豆を生産するべき地の少数山岳民族を支援するための非営利事業とはいえ、コーヒーショップの経営は今まで経験のない全く新しい分野で、それ故、失敗から学ぶことがたくさんある。

ちょうど1カ月ほど前、タイの一日のコロナウイルスの新規感染者が急増して5千人を超えたと報告した。それ以後、その勢いは止まらず、7月28日の時点で3倍超の1万7669人に達した。一日の死者は165人に及び、すでに医療崩壊が始まっている。バンコクだけでも一日の新規感染者は3997人だから、日本の人口の半分ほどのタイから考えると、相当厳しい危機的な状況だ。

現在、夜の9時から朝4時まで外出禁止令が敷かれ、飲食店は持ち帰りや宅配を除き営業禁止、大手商業施設やデパートは閉鎖されている。

過去3週間でタイに長期滞在する高齢の日本人7人が感染で死亡したとのニュースが流れた。医療体制が空回りし、病床が満杯で入院もできない。ワクチン接種の登録ができても、接種の順番が回って来ない。予約できても突然延期になった、という話をよく聞いた。実際にワクチンが足りていないのだ。そんな中で命を失った同郷の人たちを思うと心が痛む。

タイだけではなく、マレーシア、インドネシア、ミャンマーなどでもデルタ株の急速なまん延による感染の拡大が勢いを増すばかりだ。アジアの後、次に拡大するのはたぶんアフリカなのだろう。

他方、デルタ株が近い将来、収束したとしても、それに置き換わり、より強力でワクチン効果の薄い南米由来のラムダ株や他の新種の突然変異株が急速にまん延する可能性が高いことを忘れてはならない。

人間は往々にして自分の都合のいい方向に物事を考える傾向がある。しかし、緊急事態では楽観と油断は大敵だ。広く、中長期的な視野を持ち、最悪の事態を想定しながら行動することが今、求められている。

「分かち合う世界へ」は、ホームページ「新潟日報モア」の「オピニオン・視点アジア」でも読むことができます。

こぬま・ひろゆき　1953年、東京都生まれ。明治大卒。筑波大大学院博士課程前期修了。博士（農学）。元国連食糧農業機関（FAO）事務局長補兼アジア太平洋局長。元明治大学特任教授。2017年にタイ王冠勲章を受章。18年、一般社団法人（非営利）アジア自立支援機構を設立。両親、妻は本県出身。茨城県、バンコク在住。